

ては三秘の法門として顯れ、次いでの如く本尊・題目・戒壇となるなり。その關係は南無妙法蓮華經は本佛の寶號なり。三秘は此の題目より開出したるもの故惣別の關係を成立するなり。故に本佛より出でたる三秘は、三秘具足の唱題の妙行に依りて再び本法に還りて本佛と成るなり。惣より別を開し別は再び惣に歸す、是れ一体三寶の原理に基く我家の成佛なり。(未完)

原始佛教に於ける三藏の成立に就て

谷 田 亨 存

第一、現行佛教と原始佛教

今日現行の佛教は所謂發展佛教にして佛陀所說其儘の佛教に非ざる事言を俟たず。如何に吾が宗徒が此れ釋尊出世の本懷の教なりと叫ぶとも、釋尊が題目を唱へたるなりとは信ずる能はず。又如何に淨土宗の人々が佛教の本意茲に歸着するなりと主張すると雖も、釋尊が常に念佛を口にせるものなりとは考へられざるなり。凡そ現行佛教各派は假令大乘教(Mahayana 佛果を求むる教)にしても或は小

乗教 (Hinayana 阿羅漢果を求むる教) にしても、決して原始佛教其儘のものに非ず、多少變化し來れる事は疑はざる事實なり、(大乘非佛説なる論争の起るも斯る所に由る)、特に西曆前三世紀頃阿育王の傳導師派遣に次いで西曆后一世紀の迦膩色迦王朝時代に於いて北方アフガンより中央亞細亞に出で更に西藏支那朝鮮に入り終に日本に渡り來りし佛教に至つては唯器械的に印度佛教特に原始佛教を繼承し來れるものに非ずして各その地方の宗教、哲學及び文學等と融合或は取捨しつゝ、變化發達せしものなり。斯の如く變化を受け發達し來れる佛教を發展佛教と稱し、之に對して最も古き形に於ける佛教を根本佛教……佛陀の成道以來直弟子の時代約八十年間……と云ひ、其の後約八十年間を原始佛教の年代とする、或は兩年代を合して原始佛教時代ともなすを得。而して原始佛教の教義は果して如何なる内容を存するやの組織的研究をなすことは極めて困難なる事業なり。余今原始佛教の資料論に就て研究せんとするには非ず、僅か二三の資料によりて原始佛教に於ける三藏の如何に取扱はれしやと云ふ三藏成立の經過に就きて管見を述べんとするものなり。

第二、原始佛教に於ける三藏

三藏とは經(Sutra)律(Vinaya)論(Abhidharma - Sastha)の三藏(Tripitaka)のことなり。藏(Pitaka)とは暗記せられたるものといふ意味よりせば古來口より耳に入るといふ記憶の意味なりしなるべし、然

して三藏の成立を見るに經律既に必ずしも佛説のみに限らざる如く論藏に至りては其の誦出者は迦葉又は阿難等と雖も論藏の現存するものは佛滅後二百年頃のものをも最も早きものとし遅きは同四五百年より一千年頃迄の成立なり、此の成立内容よりせば佛世に於て三藏併存せりとは斷言し得ず、されど小乘の根本説一切有部の如きは發智論を佛説とするあり、余はこれを認めず、猶解深密經、阿毗達摩經を論藏となすあり。思ふに三藏の完成せるは早くも第一結集の頃なるべく從て其の成立者は佛以外の諸弟子なるを知る。次に三藏の各別に於て意義と内容に就きて述べん。

一、經 藏

經とは修多羅即ち線の義にして佛滅後の聖者等が佛陀の衆生教化の爲の説法を聚録せる恰も糸を以て花鬘を結ぶが如く、聖言の久住を意味するものなり。然して法として最初存在せしものは九部敎にして後經として型の定りたるは四阿含經なり。但し四阿含の中の新古に就きて嚴密なる區別は甚だ困難なり。又四阿含と云ふ數も確定的ならず、善見律には五部を數へ又南方所傳の (Vinaya Culavagga, Samanta Pasadika) 其他にも五尼柯耶を數ふるなり。(阿含の名稱より尼柯耶の語の方古し) 今兩傳の比較を論ぜず、唯大体に於て四阿含を擧げれば

法
Dharma

長阿含經 (Dīgha Nikāya)	…… p 三四經	漢三〇經
中阿含經 (Majjhima N)	…… p 一五二經	漢二二二經
增一阿含經 (Anguttara N)	…… p 二二三三經	漢四五二經——四七二經
雜阿含經 (Saṃyutta N)	…… p 二八八九經	漢五誦五品(小經含多)

(別に雜藏を加ふるあり五分律四分律巴利には四阿含の外十五種の小部あり)

之等四分成立の順は雜、中、長、増一、なるべし、其の内容に至ては先づ雜部の内容を見るに單に内容の雜然せるを云ふに非ず教義の相關聯せしものを集めしもの、又中部は四誦八正道等の教義を解釋せるもの、次の長阿含は佛陀及び弟子其の教義の超出せるを示して佛教々理の深底に達せしむる經、最後の増一は各經に於ける徳目を増上の分類編集せるものなり。

漢・巴阿含の經數を見るに漢譯より巴利文の經典の方が經數も多いが整束されてゐる、此点は研究に便である、少くも原始佛教を研究せんとすれば巴利語解讀の力を必要とする事今更乍ら確知されたり。次の律論亦然り。

二、戒律の起源と其の性質

止惡行善の勸誡は佛在世中戒律として遺されたり。殊に佛滅后は長老側即ち保守的思想家によりて

一層嚴重に保持されたり、而して持戒者に七衆あり、即ち、比丘、比丘尼、式叉摩耶、沙彌、沙彌尼、(以上出家)優婆塞、優婆夷(以上在俗)なり、されど理想的修行者は比丘、比丘尼なり、從て比丘、比丘尼に與へられたる制戒は嚴重なりき。次に何故に戒律は成立せしやと云ふに、佛陀成道後鹿野苑に於ける初轉法輪に際し、五比丘に説示せし四諦の妙理は唯究竟解脱に導くべき八正道の修習にありとせしに起因するなり、故に八正道は戒律一般の淵源なり。

八正道とは、正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定、の八法にして歸する所身口意三業の制戒に外ならず。而して其の戒行過程が身口より意を重ずるに在るは唯心所造なればなり。而して八正道は佛の獨創のものには非ず、過去七佛も等しく斯道を教示せりと證言されたり。然るに此の八正道は大なる背景と權威を有せしにも拘らず、余りに衷象的理論的にして原始僧團の實際的日常生活を律するに高尙過ぎし感あり、されば後年佛弟子の漸次増加するに隨ひ、實踐的規範戒律としてその必要に會する毎に漸次重大なる戒律箇條の訂正となり、増補となりたり。斯くて成立せしを當時の佛徒は之を一々暗誦記憶して三業の整束に力めたり。佛陀入滅に際し小戒は時に捨つるも可なりと云ふと雖も滅後當年の長老優婆離を誦出者として漏るゝところなく一切の戒律に關する結集を完行したり。今に遺る小乗の戒律は一重に此の結集に據る。

次に戒律の意義を見るに初は解脱に至る道程たりしが次第に放逸即生死轉廻を離るゝ意味より持戒即解脱となすに至れり。

佛陀且つて祇園に在りし時一偈を説て曰く、

“Appamado amatapadam pamado maccuno padam appamatta na miyanti ye pamatto yatta mata”

(不放逸は涅槃の道、放逸は死の道、精進なる者は死せず、放逸なるものは(生くるも)猶死せるが如し)

と不放逸を以て直ちに涅槃を實現なすといふ。而して持戒は理論より實踐を重ずれば八正道の原理的説明より俱体的の箇々の戒相を重視せり。然らばこの戒相の性質如何となれば先づ佛在世時代の戒の性質は消極的の防惡程度のものにして決して積極的懲罰の意味にはあらざりき、されば后世の作善を獎勵する意味の戒律よりせば頗る退嬰的と云はるゝも當然なり。現存の僧尼具足戒の如きは應作の尤も代表的のものなり。猶戒律と一言にいふも戒は佛の立場よりの語にして弟子よりせば律と云ふを可とす、之等の戒律を集録せるものが律藏(Vinaya pitaka)と云ふ、律藏の原始のものとしては巴利の經分別部、聚蘊部、付録部の三部は尤も價值的のものなり、經分別部は戒の箇條適要等を説き聚蘊部小品(受戒布薩等)小品(羯磨)等付録部は前二部の補助的戒律等である、何れにもせよ原始の律藏の成立

は原始佛教の後半に在りしものと思惟せらるゝなり。

三、論 藏

一般に經律論の三藏と云ふと雖も經律は佛説なり、論藏は直ちに以て佛説なりと云ふは不可なり、經律すら數回の結集に依て現型となりしもの多く論藏に至つては現存するものにして最も早きものとも佛滅後二百年頃遅きは四百年乃至一千年頃の成立なり、大体論部は佛弟子の意見の集録にして彼の小乘各部の分裂の如きは論書の相違よりせるものなり。論とは (Abhidhamma) (漢に無比法と譯し本義は勝 || 肝要) と稱し佛教特有の字也、法 (Dharma) は佛教特有の字に非ず。而して論の萌芽は佛陀當時にありしものと思惟す、夫は佛説を阿難の如く強記暗誦せるものあるに對し、説教の精要を記憶せるものなり、如是き事を Abhidhammakatha と云ふ、之は獨立せざる而も特有のものなり。後に經として編纂せるに長阿含中の十上經、衆集經——舍利弗の説法——其他中阿含、增一阿含等にも見る所なり、漢譯中の雜阿含中にもあり、之等を發見せんとするに阿毘達摩特有の數目分類等あるを標的とす、又九部經中の Veyyakaranam (記別) Upadesa (論義) 等も阿毘達摩の形なり、然るに之等の經形ならざる論との中間的のものに小尼柯耶中 Patisanahidamaya と Maha and cula nidesa あり、更に論として獨立せるものに六足論、發智論、之を完成せる大毘婆娑論等あり、原始論藏の研究資料

として價值的のものなり。

以上原始佛教の三藏に就て余の近時の所懐を述べしも若し専門的に原始聖典に就きて究めんには原始佛教其れ自身の獨立的研究も勿論必要なれども原始聖典が大小に廻轉せしものなれば翻て發展佛教より顧みるも可なり。されど少くも佛陀を中心としての研究ならざるべからず。 [了]

(延嶺學窓にて脱稿)

吾祖の時機適化せる五戒の提唱

中 澤 葉 爾 津

問者あつて吾宗の實踐門の窮極は如何と問はく、答者必ず唱題受持一行によつて我身卽是佛となるにありと答ふるであらう。しかして更に唱へらるゝ題目の性質を鑑みるに、題目は妙法五字の單字の名號にすぎずと見ゆれど、實にその性質に於ては、宇宙の根本原理にして、森羅萬象圓融備足して、缺くる所なきものなれば、又宇宙の根本的生命と名くべきものである。(吾宗に於ては、この宇宙の根本的生命を釋尊の永遠的生命に於て見る。今は詳説をはぶく) かくの如く甚遠なる題目なれば一唱の中に佛